

## I. 要約

本調査では、日本体育協会が毎年開催しているスポーツ少年団指導者全国研究大会および全国各地で開催されるスポーツ少年団認定育成員研修会に参加する指導者を対象とし、平成23年6月～平成23年11月の間に直接配布直接回収による質問紙調査を行った。有効回答数は698であった。主な調査結果は以下の通りである。

- 1) 運動・スポーツ指導種目をみると、「サッカー」が15.8%と最も多く、次いで「軟式野球」が15.1%、「バレーボール」13.8%、「剣道」10.9%、「複合種目」9.3%、「空手道」9.0%、「バスケットボール」7.6%、「ソフトボール」5.6%、「柔道」4.7%、「陸上競技」4.3%と続く。
- 2) 指導している子どもの年代は、「小学生」が71.1%と7割以上を占めており、次いで「中学生」が15.0%、「未就学児」7.7%、「高校生」6.2%であった。指導頻度は「週2回」が36.0%と最も多く、次いで「週1回」が24.1%、「週3回」21.6%と続く。また、1回あたりの指導時間は「60分以上120分未満」が54.3%と最も多く、次いで「120分以上180分未満」が28.7%、「60分未満」8.2%と続く。
- 3) 子どもに運動・スポーツを指導する際に指導者が参考しているものをたずねたところ、「自分のスポーツ経験」が73.1%と最も多く、7割以上の指導者が自らの運動・スポーツ活動の経験をもとに指導していることが明らかとなった。次いで「取得後に開催される資格に関する研修会等」が53.7%、「専門書や指導参考書等」が52.6%、「機関誌(スポーツジャスト)や資格取得時の講習のテキスト」が52.0%であった。
- 4) 子どもの運動能力を高めるにはどうしたら良いと思うかたずねたところ、「いろいろな運動遊びを経験する」95.7%、「特定のスポーツ活動を経験する」1.6%という回答が得られ、ほとんどの指導者が子どもの運動能力を高めるためにはいろいろな運動遊びを経験することの重要性を認識していた。

また、子どもがスポーツ種目をひとつに絞って専門的に行うのに適していると思う時期をたずねたところ、「中学生」が42.0%と最も多く、次いで「高校生」が19.5%、「小学校高学年」18.9%、「小学校中学年」8.6%と続いた。

練習試合を含めた子どもの試合参加についての考えをたずねたところ、「できる限り多くの子どもに機会を与える」93.7%、「上手な子どもに優先的に機会を与える」2.7%という回答が得られた。

- 5) 外部指導者について「知っている」と回答した者は79.5%と最も多く、「聞いたことがある」と回答した13.3%とあわせると、9割以上が「外部指導者」という言葉を耳にしているようである。また、外部指導者について「知っている」もしくは「聞いたことがある」と回答した者の中で、外部指導者の「経験がある」と回答した者は31.1%、「経験がない」と回答した者は64.4%であり、6割以上の指導者が外部指導者としての指導経験がないことが示された。
- 6) 幼少年期における運動・スポーツ組織への加入歴をたずねたところ、幼少年期において運動・スポーツ組織への加入経験のない者が67.1%と7割近くを占め、加入経験のある者は31.9%と3割程度にとどまっていた。性別による大きな違いはみられなかったが、年代別にみると、運動・スポーツ組織への加入経験は年代による差が大きいことがみてとれた。